

第1回 新型コロナウイルスの影響で変わる企業の働き方

コロナで一変!

金融機関の働き方改革

新連載
先進事例をもとに
今後への活路を
見出す

松久晃士
株式会社ワーク・ライフバランス

日 本社会で注目されているテーマの1つに「働き方改革」がある。2019年、約10年ぶりに労働基準法が改正され、働く時間には上限が設定された。これによって企業や組織では、限られた時間の中で最大限の成果を求められるようになったのである。深刻な人手不足による限られた人員で仕事をこなさなければならぬ企業も多いだろう。

これまでの働き方と同じ量の仕事を続けていくには、もはや「ちよっとした工夫」や「効率化の積み重ね」では太刀打ちできない状況になってきている。仕事の進め方を根本的に変えていく変革が求められているわけだ。

さらに今、新型コロナウイルス感染症が、働き方改革に多大な影響を与えている。感染拡大防止のための措置として、時短勤務や在宅勤務が急速に広がった。実は、これまでも多くの企業で在宅勤務の制度は整備されていたのだが、「実際に制度を利用したことがある」という人は少数派であった。在宅勤務ができるのは、管理監督者であったり、子育てや介護によって時間に制約がある従業員であったりすることが一般的であったのだ。

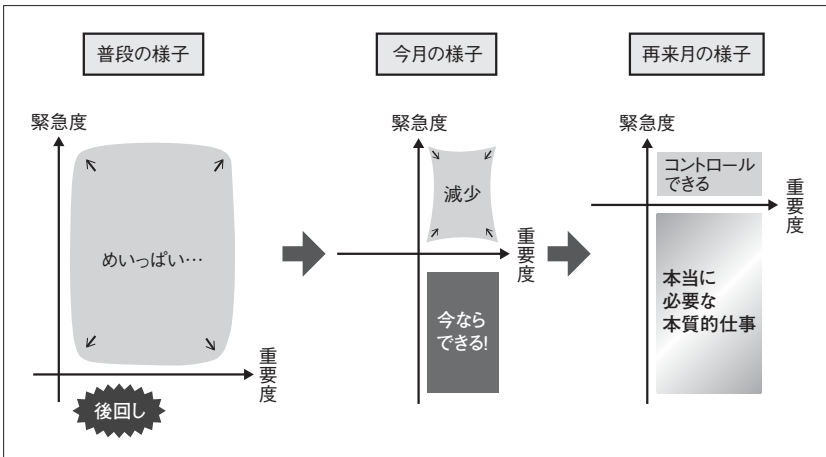
そのため、新型コロナウイルスによる社会全体の要請により、半ば強制的に在宅勤務を推進しなければならぬ状況に対して、戸惑っている企業が多い

が実態ではないだろうか。本連載では、働き方改革に取り組み好事例を紹介しながら、金融機関という職場での活路を見出すヒントにつなげていきたい。

「なぜできないか」から「どうやるか」へシフト

新型コロナウイルスは、働き方改革に極めて大きな影響を与えている。これまでは組織側が働き方改革を推進しようとしても、「私たちの仕事には向いていない」「業務量が減らないので労働時間は減らせない」などの「できない理由」がいくらでも考えられた。だが今回は、これらの「理由」を越えて、働き方全般を社会全体で考え直さなくては

図表 「緊急度・重要度マトリクス」で目指す時間の使い方



ならなくなった。「どうやってやるか」だけを考える状況にある。もちろん、このような強制的かつ大きな変更は、多くの人の働き方・仕事の進め方に

「ひずみ」を生んでしまっていることだろう。仕事を緊急度・重要度でマトリクスにすると、一方で、業務遂行に関して様々な制約が生じているこの現状を、「好機」と捉える動きもある。

図表を見てほしい。このマトリクスは、仕事内容を「緊急度」「重要度」の2軸で分けて考え、目指すべき時間の使い方を表している。筆者はコンサルタントとして、これまで1万3000人以上に働き方のアドバイスを行ってきたが、面談したほとんどの人が「緊急かつ重要な仕事」に追われていた。そのため、例えば「もっと良い方法・手段を模索する」「チームワークを高める」「部下や後輩

POINT

★新型コロナウイルスによる影響を、働き方を見直すチャンスと捉えられるかどうか重要に

★緊急かつ重要な仕事が縮小、「本当に必要な本質的仕事」に時間が割けるようになる

「育成する」といったことは、緊急ではないために後回しにされ、「とにかく目の前の仕事をこなす」という状況にあった。

しかし今、新型コロナウイルスの拡大による緊急事態宣言の発令に伴い、多くの業種・職種において時間の使い方が変化し、「緊急かつ重要な仕事」の象限が縮小する傾向に転じている。

これまで「重要性は高いが緊急性が低い」として後回しにしてきた仕事―すなわち「本当に必要な本質的仕事」に時間を割くことができるようになったのだ（こうした仕事は「将来への投資」「仕込



まつひさ・こうじ

1万名以上のビジネスパーソンに働き方改革のアドバイスを提供。中央省庁・警察組織・研究機関など特殊性の高い業種・職種における働き方改革の支援にも定評がある。静岡県三島市在住。一児の父。すぐに実践できる働き方改革のコツをtwitterで発信中。(@MatsuhisaKoji)

みの時間」と表現できる。今回の状況を、働き方を見直すチャンスと捉えることができるかどうかで、新型コロナウイルス収束後の立ち位置が変わってくることだろう。

さて、あなたのマトリクスの右下にはどんな仕事があるだろうか。ぜひ考えてみてほしい。